

たけ　い　び　く　にが　さこ
武井比丘尼迫古墳

1992

山口県徳山市教育委員会

武井比丘尼迫古墳

1992

德山市教育委員会

序

徳山市菊川地区には多くの遺跡があり、古代から人々が住んでいたことを窺うことができます。中世になると、大内氏の重臣であった陶氏がこの地に本拠地を構えたほか、各地に板碑や五輪塔をはじめ様々な遺物が見られ、歴史上の重要な舞台ともなっています。武井比丘尼迫古墳は古くから知られていましたが、平成2年6月、集中豪雨により天井部が崩れたため、翌3年2月から山口県埋蔵文化財センターにより発掘調査を実施し、この度その記録をまとめたものです。

現代の私たちの生活は、文字通り古代の人々の生活の上に営まれています。地中に埋もれ遺されてきた過去の貴重な文化財の記録を残すことは、我々の果たすべき責務でありましょう。この調査報告が、その役割の一端を担うことを心より祈念いたします。

平成4年3月

徳山市教育委員会

教育長 松村精治

例　　言

1. 調査は、山口県徳山市大字下上字武井に所在する武井比丘尼追古墳が石垣の損壊によって原形を損なうおそれが出てきたため、石垣の修復に先立って行ったものである。本書はその調査報告である。
2. 調査は、徳山市教育委員会が主体となって行い、山口県埋蔵文化財センターが技術援助を行った。
3. 調査の実施に当たり、土地所有者をはじめ地元の人々の多大なる協力を得た。記して謝意を表する。
4. 本書に掲載した第1図は、建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図「徳山市」を複製したものである。
5. 本書に使用した方位は磁北で示し、標高は海拔標高で示した。
6. 図版中の遺物番号は、実測図中の遺物番号と対応する。
7. 本書の作成に当たっては、山口県埋蔵文化財センターの職員の協力を得た。本書の執筆・編集は和田・石井が行った。

本　文　目　次

I 位置と環境	1
II 調査に至る経緯と調査の概要	2
III 調査の成果	3
IV まとめ	7

挿　図　目　次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図 石室実測図①	3
第3図 石室実測図②	4
第4図 石室出土遺物実測図	6
第5図 武井採集須恵器実測図	6

図　版　目　次

図版1 古墳遠景 古墳近景 調査前 天井石検出	
図版2 右側壁石積み 床面敷石 刀子出土状態 天井石完掘	
図版3 石室奥壁 石室完掘	
図版4 石室出土遺物 武井採集須恵器	

I 位置と環境

武井比丘尼追古墳は、新南陽市の北にそびえる四熊ヶ岳（504m）を主峰とする山々から瀬戸内海方面へ延びる緩やかな丘陵上に位置し、南は永源山が視界を遮っている。この永源山と本遺跡の間を東西に国道2号線が走り、丘陵の東には富田川に沿って鹿野に通じる県道が走る。

徳山市西部から新南陽市にかけては、縄文・弥生時代の遺跡は現在まであまり知られていないのに対し、古墳は数多く知られている。前期の古墳としては、新南陽市竹島の御家老屋敷古墳がある。この古墳は、中国製の三角縁神獣鏡をはじめとして多数の副葬品を出土したことでも知られ、県下最古の畿内型前方後円墳である。武井の丘陵上からは堂山出土と伝えられる家形石棺や武井石棺などがあるが、時期は不明である。この地域には後期の古墳は、密に分布している。永源山墳墓群は、山の北東の尾根上に造られた横穴墓群で、成人男性3体、女性2体、小児1体が発見された。副葬品としては、土師器や須恵器のほか鉄器やガラス小玉などが出土した。富田川流域の山頂には、横穴式石室が比較的良く保存された上内谷古墳がある。上内谷古墳からやや上流に遡ると、川本古墳、曾根古墳、源氏原古墳等がある。川本古墳は、谷筋の低地に築造され、石室は倒壊しているがかなり規模の大きな石室であったと思われる。川の右岸には、南野古墳や法安寺古墳が知られている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

II 調査に至る経緯と調査の概要

武井比丘尼迫古墳は、玄室が石垣の崖面に開口しており、地元でも古くから良く知られていた。古墳は上段の田畠の造成によって上部墳丘が削平され、また下段の造成によって羨道及び玄室の一部が削り取られていた。現状は、石室の残存部分が石垣の一部として取り込まれ、石室の天井付近まで下段の造成土によって埋め込まれていた。

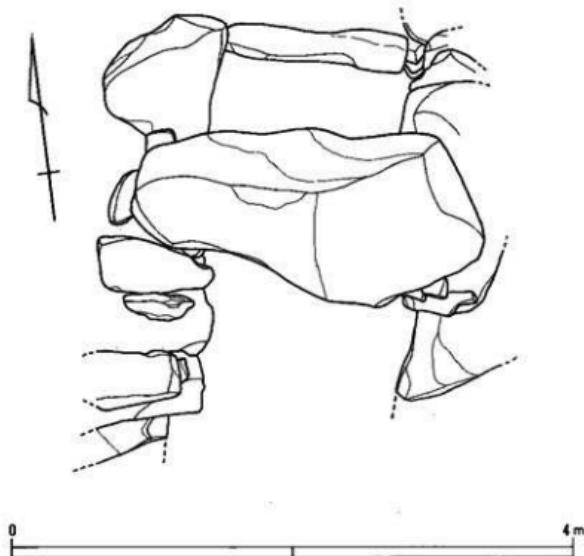
長雨によって地盤が緩み、周囲の石垣の石と共に天井石が動き出したため、土地所有者より徳山市教育委員会に報告された。これを受けて徳山市教育委員会では、山口県埋蔵文化財センターと古墳の取り扱いについて協議した。協議の結果、石垣の復旧に伴って石室の現状が損なわれる可能性があると判断し、石垣の復旧工事に先立って記録保存のための発掘調査を行うことにした。調査は徳山市教育委員会が主体となり、山口県埋蔵文化財センターが技術援助を行った。

調査は必要最低限にとどめることとし、平成3年2月26日より現地調査を開始した。石室全体がほぼ埋没し、天井石が前にずれていたため、調査は石室の真上から開始した。石室の真上に試掘溝を掘り込んだ結果、上段開墾時に一番奥の天井石が取り去られ、残りは2枚であることが判明した。この内、前の石はずれて危険であるため、クレーンを用いて除去した。その後羨道部の残存の有無を確認するため、石垣に沿って横断する方向に試掘溝を入れ、同時に玄室内の掘り込みを開始した。羨道部の試掘によって羨道や玄室の前面は、下段の田畠の造成の際に床面まで削り取られていることが確認された。玄室は2mあまりの高さがあり、危険防止のため上段の側石の間に丸太で支えをして掘り込みを進めた。掘り込みの結果、本来の奥壁の前に後世石垣状の壁が築かれたことが判明した。この石垣は床から中段までは偏平な割石を積み、中段から上段は小さな自然石を積んでいた。石垣の中～下段は石の隙間の埋土中に中・近世の土器や人骨片が含まれていた。この石垣を除去すると、一枚の大きな板石を立てた本来の奥壁が現れ、巨石墳であることが明らかになった。一方玄室の床面は部分的に攢乱を受けていたが、敷き詰められた玉砂利が比較的良く残っていた。攢乱によって副葬品はほとんど失われており、中・近世の土器片と共にわずかな須恵器片や鉄器片が出土したのみであった。上段の田畠開墾時の攢乱によって、掘り方は今回の調査では明らかにできなかった。石室を完掘した後に、写真撮影、実測図の作成等の記録を行った。現地調査は平成3年3月20日を以て全て終了した。石室は、その後石垣の修復工事に伴って埋め戻され、保存されている。

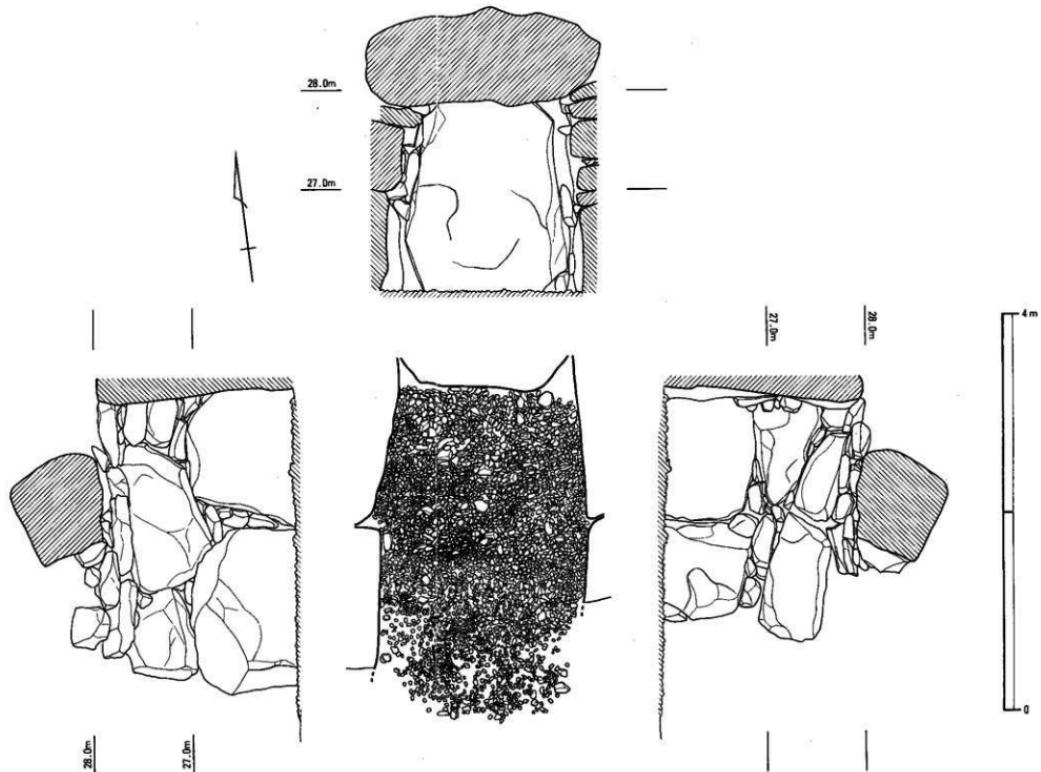
III 調査の成果

1. 石室（第2・3図 図版1～3）

先に述べたように、田畠の造成によって破壊されており、墳丘は全く原形をとどめていない。主体部は南に開口する横穴式石室で、主軸を S10°E にとる。羨道は床面まで削り取られ、玄室は側石が一部割り取られている。玄室の平面形はやや胴張りをもつ長方形と思われ、現存部で最大長290cm、最大幅210cm、床面から天井石までの高さは192cmである。奥壁は幅約1.6m、高さ1.8m、上端幅約30cmの鏡石を据えている。側石は下段に幅1m以上、高さ1m程度の大きな石を据え、その上に高さ50cm程度の石を置き、天井石との隙間を小さな石で埋めている。天井石は3～4枚と考えられるが、最も奥の天井石は上から抜きとられ、奥から3番目の天井石は石垣の崩れに伴って大きく動いていた。2番目の石はかろうじてほぼ原位置を保っている。この天井石は幅約2.4m、奥行き約1.1m、高さ1m弱である。側石の積み方は、上に行くほど幅が若干狭くなるように持ち送り状に積んでいる。床面は径5～10cm程度の河原石を一面に敷き詰めているが、玄門側は攪乱が著しく床面の玉砂利がまばらになっている。石室内の埋土は、床面まで後世の攪乱土で中・近世の土器片を含んでいた。副葬品はほとんど失われており、わずかに玉砂利の間に入り込んだ状態で、須恵器の杯片や刀子片などが出土した。



第2図 石室実測図①



第3図 石室実測図②

2. 出土遺物

須恵器（第4図1・2 図版4）

1は須恵器の杯身としたが、蓋の可能性もある。口径は10cm弱と小型である。底部はほとんど平坦部をもたず、体部はわずかに内湾気味に斜めに立ち上がる。受部はやや外側が膨らんで斜め上方にのび、立ち上がり部は薄くわずかに内傾して立ち上がる。立ち上がり部と受部の間は弧状に窪む。外面は、底部はヘラ切りのままで、体部は回転ナデ調整である。内面は全体に回転ナデ調整で、体部中位にかたかな「フ」状のヘラ記号がみられる。範轄の回転方向は時計回りである。

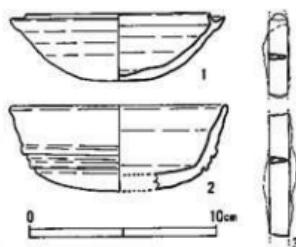
2は杯身または高杯の杯部で、底部の大部分は欠損する。底部はやや内湾気味に緩やかに立ち上がる。底部端で屈折し、体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁端部に続く。器高は比較的高く、口縁端部は薄くなり丸みをもつ。底部と体部の境及び体部の下位に突帯をもつ。器面調整は外面底部はヘラ切りのままで、体部以上は回転ナデである。内面は体部が回転ナデ、底部は確認できない。器面のかなり広範囲に自然釉が認められる。範轄の回転方向は時計と逆回りである。

鉄器（第4図3 図版4）

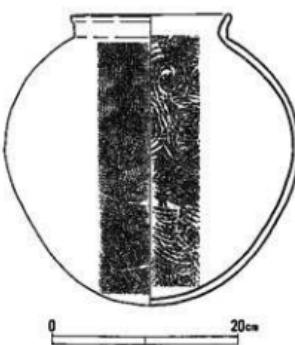
3は刀子で、2片とも同一個体と思われる。幅は比較的狭く約1cmで、現存長は両方の破片を合わせて10.8cmである。上の破片は先端がやや狭くなっている、刃先に近い部分と思われる。断面形は、二等辺三角形を呈する。

西井採集須恵器（第5図 図版4）

第5図は、調査中に古墳から北東にやや離れた水田の側溝の掘削中に発見された完形の須恵器の甕である。出土状態からみて、古墳の副葬品と推定される。底部は丸底で、胴部は球形に近く最大径は中位にある。口縁部は短く、わずかに弧を描いて外反し、上端部外面はやや玉縁状に肥厚させている。外面は全体にタタキを施した後、胴部に横方向のカキ目を施している。口縁部は内外面とも回転ナデ、胴部内面は円弧タタキが全面にみられる。口縁部の特徴から、7世紀前半代のものとみられる。



第4図 石室出土遺物実測図



第5図 武井採集須恵器実測図

IV まとめ

今回調査を行った武井比丘尼追古墳は、羨道及び石室の一部を削り取られている。残存部から推定して、築造時には有数の巨大石室墳であったと思われる。

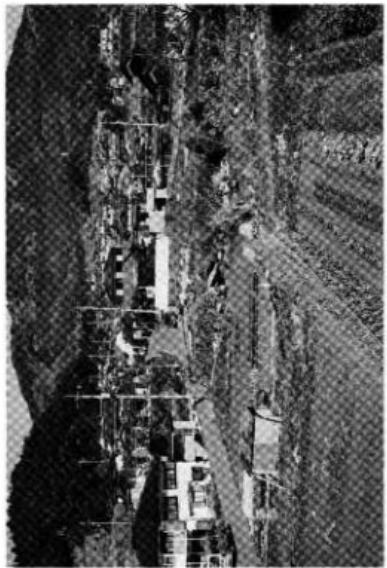
まず残存する石室の形態と出土した須恵器片から、古墳の築造時期を考えてみたい。比丘尼追古墳の玄室は、奥壁は一枚の鏡石を据え、側石は巨石を積み間隙を小さな石で埋めており、典型的な巨石石室墳である。巨石による石室の構築は、横穴式石室の中でも最も後出する要素の一つであり、実年代としては7世紀の前半に位置付けられている。出土した須恵器片は小数のため、築造時のものか追葬時のものかは問題となるところである。蓋杯については、口径が小さくなり、底部が小さく体部が斜めに直線的に立ち上がる特徴からみて、陶邑編年のII型式6段階～III型式1段階に当るとみられる。以上の検討から比丘尼追古墳の築造年代は明確ではないが、7世紀の前半を中心とした時期と考えられる。從来山口県の横穴式石室墳は、6世紀後半にその大部分がおかれていた。しかし、最近の石室形態や須恵器の編年の研究からみると、この内の幾つかは7世紀代に下る可能性がある。

次に比丘尼追古墳周辺地域について若干みてみたい。比丘尼追古墳の立地する武井丘陵から富田川流域の菊川盆地にかけて、数多くの古墳が知られている。武井丘陵上では、比丘尼追古墳が少なくとも3基以上の古墳からなる古墳群の1基であったことが記録に残っている。また、比丘尼追古墳より標高の高い位置にも横穴式石室の残骸が見られる。北東に隣接する菊川盆地周辺では、山頂に造られた上内谷古墳をはじめ、川本古墳や曾根古墳などの横穴式石室墳がある。またこの地域では伝堂山出土の家形石棺や、菊川地区で出土した舟形石棺などの県内では数少ない種類の石棺が出土している。武井丘陵の南には永源山横穴墓群があり、この地域は相当数の古墳が集中する地域である。この地域の周辺は平地が少なく、富田川流域に菊川盆地のほかわずかに細長い平地がみられるのみである。稲作に適した広い平地をもたないこの地域に営まれた多数の古墳は、何を基盤とした勢力が築いたものであろうか。この地域は現在も瀬戸内海沿岸を走る交通路と須々万や鹿野などの内陸部に向かうルートの分岐点である。当時は海岸線が現在よりかなり内陸に入り込んでいたと考えられ、この地は海陸交通路の要所であったと考えられる。比丘尼追古墳をはじめとする多くの古墳は、交通路や交易を支配した集団によって営まれたものかもしれない。いずれにしてもこの周辺地域の遺跡の調査はほとんど行われておらず、今後の研究が期待されるところである。

—参考文献—

柳沢一男「横穴式石室からみた地域間動向・近畿と九州」「横穴式石室を考える—近畿の横穴式石室とその系譜—」帝塚山考古学研究所 1990

*須恵器の編年は中村浩「須恵器編年図表」「やきもの事典」平凡社 1984年によった。



図版2



床面敷石



天井石完塊 (北より)



右側壁石礎み



刀子出土状態

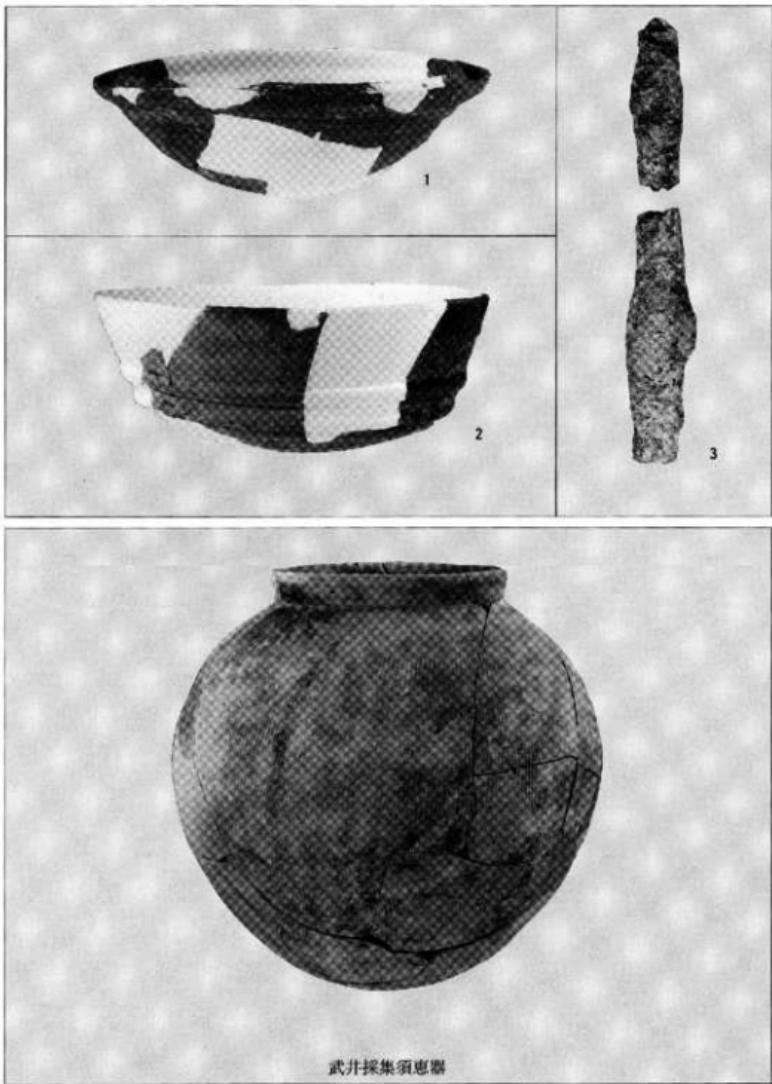


石室奥壁



石室完掘（南より）

图版 4



武井采集須惠器

石室出土遺物・武井采集須惠器

武井比丘尼追古墳

平成4年3月

発行 德山市教育委員会

印刷 大村印刷株式会社
